

## 令和2年度 浜田教育事務所だより

第79号 令和2年7月3日

- ◆調整監あいさつ (p.1)
- ◆特別支援教育について (p.3)
- ◆各市町の取組～邑南町～ (p.6)
- ◆人権・同和教育について (pp.2-3)
- ◆各市町の取組～浜田市～ (pp.4-6)

### 「今、ここ」で

調整監 伊津 洋士

先日、自宅で「あの試合をもう一度!スポーツ名勝負」というテレビ番組を見ました。新型コロナウイルスの影響を受ける中で、テレビ業界もまた様々な方法で対策を練っているのが分かります。寝転がって1989年ラグビー日本選手権を眺めていたわたしですが、昨年のワールドカップ日本大会に負けなくらいの盛りあがりを徐々に感じ、いつの間にか夢中になってしまいました。神戸製鋼キャプテンの平尾誠二選手の華麗なプレーに見とれながら、以前参加した講義を思い出しましたので、当時の資料を探し出しました。「人を育てるリーダーシップ」という講義の中での平尾さんのメッセージを、わたしはこのようにメモしています。



- ・状況の悪いときに、どのように動くのが大切である。
- ・ピンチのときにどういった所作をするのかを周りは見ている。
- ・「今、ここ」に対し、全力で取り組める力、心の強さを育成することが必要である。

4月以降学校では、臨時休業期間を含め、子どもにとっても大人にとっても不安定な時間を過ごしておられることと思います。そのような中でも、今の状況と向き合い、乗り越えようと取り組む多くの大人や子どもの姿を目にします。まさに、状況の悪いとき、ピンチのときにアイデアを出し合い、一丸となって日々の歩みを進めておられます。平尾さんの講義は随分前のことですので、もちろん新型コロナウイルス感染症対策ではありませんが、今のわたしたちに、改めて励ましをもらったような気がしました。

さて、毎年行っている教育事務所長訪問ですが、今年度は、コロナウイルス感染拡大防止のため、新しく校長先生が着任された学校に絞って訪問させていただきました。着任された学校での校長先生の経営方針や4月からの学校の様子、また学校事務の状況をお聞きすることができましたので、浜田教育事務所の今年度の取組や県の教育施策に生かしていきます。学校再開直後の慌ただしい時期に時間をとっていただきまして、大変ありがとうございました。

面談では、年度当初に校長先生が示された学校経営方針に沿って、職員全員が一体となり、現状に応じた組織的な学校運営をスタートされたことをお聞きしました。学校は感染症対策のため、前例のない配慮や苦労を重ねながらも、自校の課題を解決するための取組を着実に進めておられます。自校の強みを生かしたカリキュラム・マネジメント、今の状況をチャンスにかえるための工夫、大人自らが変わろうとする柔軟さやしなやかさなど、新型コロナウイルスに負けない学校の前向きな思いが伝わってきました。この度伺っていない学校でも、先生方の豊かな発想や家庭地域の協力により、子どもたちに力を付けるための様々な形態の学習や支援が進められていると聞いています。コロナ禍の令和2年度スタートですが、そうやって職員が協働する過程で、新たな可能性に気づきながら、子どもたちを大切にしたい学校運営が行われていると感じました。

子どもたちにとっては例年と違い、夏休みまではもうしばらく登校する日々が続きます。登校できる喜びに戸惑いが入り交じっているかもしれません。今「新しい生活様式」を踏まえた行動基準が示される中で、学校ではこれまで同様に、子どもたちの「生きる力」を育てていくための教育活動を進めておられます。「今、ここ」でがんばっている学校や市町教育委員会とともに、わたしたち浜田教育事務所スタッフも一緒になって子どもたちの成長を支えていきたいと思っています。

## 人権同和教育について

### 自尊感情の育成について

#### 人権・同和教育指導員 竹中律子

今年度、学習指導上、生徒指導上又は進路指導上特別の配慮が必要と認められる事情を有する児童又は生徒に、学校全体として課題を明確にした特別の指導を充実していくための教諭等の加配について、運用の見直しがありました。管理職を中心とした学校組織全体としての取組がさらに推進され、子どもたちの進路保障もさらに充実することを願っています。



さて、この度の運用の見直しにおいても、そして、進路保障を柱とした人権教育の推進においても、管理職を中心とした学校組織全体としての取組は、とても大事です。しかし、これらの取組が充実するためには、今一度教職員一人一人の子どもたちへの向き合い方を見直し考えてみる必要があるのではないかと思います。『しまねがめざす人権教育第2集』には、人権教育の推進にあたって大切にしたいことの一つとして、「一人一人のありのままを受け止め、自尊感情を育む」とあります。そして、「子どもたち一人一人をありのまま受け止めることから始める」ということは、自尊感情育成の基盤ともいわれます。

近年度々島根県で講演されている神戸親和女子大学の**新保真紀子**先生も、自尊感情の重要性について話をされています。新保先生は、「教職員をはじめ、身近な他者から、ありのままに受け止められ、対応されることにより、子どもたちは自身の自尊感情を育てていく。そして、ありのままの自分を丸ごと認めることができるようになり、自分で、自分のセルフイメージ（これが、わたし）というイメージをつくっていく。その過程で、子どもたちは、

- ・ 学ぶ力や挑戦する力
- ・ 人間関係を築く力やコミュニケーション力
- ・ 感情を読み解きコントロールできる力を育み自立する力

を身につけていく。」とも言われます。

ところで、自尊感情育成の基盤といわれる「子どもたち一人一人をありのまま受け止めることから始める」とは、どんな向き合い方なのでしょう。ある特別支援教育の会で、島根大学大学院の**原広治**先生が、「子どもを支えるということ」について話をされています。原先生は、「支援という言葉、教員それは、支援する側の気付きから始まるが、それは、支援を期待する相手の思いに沿うべきである。また、子どもたち一人一人個々の思いに身と心をはせ、相手の思いを探るところから考え始めることである。」とも言っておられます。「一人一人をありのまま受け止めることから始める」という姿勢は、支援の姿勢と重なります。支援、support は、こちらからではなく、相手の意を受けて行うもの。そのためには、〈うまくいかなさ〉への対応策ではなく、〈うまくいかなさのある彼ら〉への向き合い方が重要です。

教員は、どうしても教える、指導するということを念頭に置きやすいので、支援のスタンスではなく、最初から指導のスタンスで向き合ってしまうがちではないでしょうか。そこには、「困った子ども」という意識がありはしないでしょうか。「困っている子ども」という意識であれば、支援のスタンスにたてるのではないかと思います。

つぎに、人権教育の取組の一つ、自尊感情育成のための取組について考えてみたいと思います。

よく聞く取組は、褒めることで、自尊感情を育むというものです。教職員が良いと思う子どものある面、望ましい面を見て褒めることにより自尊感情を高めるというものです。しかし、この場合、教職員の側の評価の姿勢が感じられるのは、私だけでしょうか。子どもを褒めるという場合、存在を丸ごと認め、そして、結果だけではなく、そこに至る過程も含めて評価し、認めることであれば、「一人一人をありのまま受け止めることから始める」につながり、自尊感情の育成につながると思います。褒めるということは、とてもむずかしいものだと感じます。

自尊感情を育てるために、個人でもできる取組について、令和元年度のある高等学校の取組からつぎの3つを紹介したいと思います。

- ① 認める
- ② 比べない(他人と) & 比べる(過去の自分と)
- ③ 成功体験の積み重ね

まずは、「認める」です。例えば、笑顔で声かけ、名前を呼ぶ、こちらからあいさつをする等があります。この時、子どもたちに、そして大人もだと思うのですが、大切にされている感覚を育むという意味で自尊感情育成にとっても有効です。

つぎの「比べない(他人と) & 比べる(過去の自分と)」ですが、これは、取り組んだ高校が、自尊感情を育むのにとっても重要だと感じたという取組です。他人と比べるのではなく、今の自分と過去の自分を比べてみるということです。教員の側も、比べる対象は、過去のその子どもと今のその子どもということです。

そして、「成功体験の積み重ね」の取組についてです。目標設定&振り返りを可視化すること、さらには、失敗時は、フォローをすることにより、子どもたちが成功体験を積み重ね、自己の成長を促すという丁寧な取組を行うということです。

以上の取組を、個人でもできることとして教職員個々が意識的にしっかりやるとともに、それらが共有されることにより、隠れたカリキュラムとなっていくと考えられます。

また、学校全体での取組には、つぎのようなことが多いのではないかと思います。

- 分かる授業の推進や基礎学力の定着により、自己肯定感を育てる。
- 生徒主体の集団活動を通じて、自己肯定感を育てる。
- あいさつ運動

等です。学校の実態により取組はいろいろあるのではないかと思います。

「子どもたち一人一人をありのまま受け止めることから始める」ということ意識し、自尊感情を育てる取組、個人でもできる取組や学校全体での取組が各校で進むことを願っています。

## 特別支援教育について

「夢」「勇氣」「意志」をもち・・・

特別支援教育支援専任教員 佐々本 茂

島根県では昨年、「特別支援教育在り方検討委員会」が設置され、今後の島根県の特別支援教育の在り方について検討され、「島根県の特別支援教育の在り方について」として提言されました。その提言の第2章で本県の特別支援教育で育てたい人間像が次のように示されました。また、そこには「自分らしく豊かに生きる」ということばも添えられています



- 夢をもち、自立や社会参加に向けて学び続けようとする人
- 勇氣をもち、自分を信じ、他者を信頼しながら社会に向かおうとする人
- 意志をもち、しなやかに、他者と共に生きようとする人

またこの章の中で、これらの人間像に向かうために、子ども一人一人の思いや願いを受け止めながら教育的ニーズを把握し、指導・支援を続けていくこと、子どもの自尊感情を育むとともに、自己選択、自己決定ができるように支えていくこと、子どもがうまくいかないと思うときに子どもに寄り添いながら共に考えること等、特別支援教育を進めていく上で、とても大切なことが示されています。ぜひ、ご一読ください。

今年度も、たくさんの学校から声をおかけいただき、ありがとうございます。ご相談の際は、これらの人間像に向かって、先生方からのご相談と一緒に考えさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

[「島根県の特別支援教育の在り方について」](#) 島根県教育庁特別支援教育課HPからご覧になれます

特別支援教育支援専任教員

小中学校の先生方からの特別支援教育に関する相談に、学校訪問や電話相談で応じます。まずは、お電話ください。

【 0855-29-5753 】



## 各市町の取組から ～浜田市～

### “共に育つ”「はまだっ子共育（ともいく）」

#### 浜田市教育委員会 派遣社会教育主事 小川 豊

「はまだっ子共育」は、学校と地域社会が、目標やビジョンを共有し、協働しながら、子どもも大人も共に高まり合い、つながりのある魅力あふれる地域を創生することを目的としています。事業の柱は、地域学校協働活動と家庭教育支援活動です。共育（ともいく）は、「子どもたちに身に付けさせたい力」について、地域、学校、家庭が共有しながら取り組むことを目指しています。



#### 「はまだっ子共育」で目指す「子どもたちに身に付けさせたい力」

ふるさとを愛し 郷土愛	自分を高め 向上心	周りをつながり 連帯感	自分に自信を持つ 自尊心
ふるさとのよさを味わい、誇りに思い、豊かな感性を身に付ける。地域のよさを知り、他者に伝える。地域に貢献できることを考え、行動しようとする。	自分で考える。自分で決める。自分の考えを積極的に伝える。主体的に課題を見つける。前向きに目標を設定する。集中する。粘り強く続ける。	他者を共感的に深く思う。他者と協力し、良好な人間関係を築く。お互いを尊重する。感謝の気持ちを伝える。命を大切にする。人や動植物に優しくする。	自分のよさを受け止め、自分を大切にする。自分のことを認め肯定する。自分が周りの人に役立っていると感じる。自らの考えで行動する。
ふるさと愛 地域貢献	表現力・発信力・行動力 主体性・探求心	共感性・協調性 人権尊重・豊かな愛情	自尊感情・自己肯定感 自己有用感・自主性

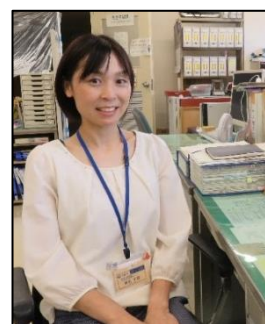
派遣社会教育主事は、学校と地域（公民館）の連携協働を促進する役割を担っています。

#### 浜田市教育委員会 派遣社会教育主事 原田 千里

3月までは、島根県立少年自然の家で勤務していました。宿泊体験活動や公民館の自然体験活動の支援などを通して、学校教育と社会教育の両面から教育について考えることができました。

さて、今年度の私の職務である2つの事業を紹介します。

1つ目は、「家庭教育支援」です。浜田市では、学校・家庭・地域が連携し子どもを育てていく「はまだっ子共育（ともいく）」を推進しています。家庭教育支援は、この共育の柱の1つです。今年度は、公民館を活動拠点とした家庭教育支援チームをモデル的に組織し、地域の状況に応じた家庭教育支援活動を推進することとしています。浜田市の公民館は、来年度コミュニティセンター化されます。この度のモデル地域の取組を参考に、来年度からそれぞれの地域で家庭教育支援チームの組織化が進み、地域独自の家庭教育支援が推進されることを目指しています。



2つ目は、「高校の魅力化」です。浜田市には、浜田水産高校・浜田商業高校・浜田高校の3つの県立高校があります。今年度は、浜田市の高校魅力化コンソーシアムの構築を目指しています。高校生を浜田市全体で育てていこうという機運を高め、高校生だけでなく、関わる人々も共に学び、成長していくことを支える体制づくりを進めます。

このように、子どもから大人までが“共に育つ”浜田市を目指して、たくさんの方々と連携を図りながら、事業を進めていきたいと思っております。

## 「子どもが主人公の教育を目指して」

浜田市教育委員会 派遣指導主事 前原 靖子

浜田市派遣指導主事4年目になりました。今年度も、よろしくお願ひします。

浜田市では、「夢を持ち郷土を愛する子ども」の育成のため、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善の取組について、「図書館活用教育」と「協調学習」の2つの柱を中心に取り組みます。

「図書館活用教育」については、①図書館を使った調べる学習コンクール、②学校図書館活用教育研究指定校(第一中学校・金城中学校)、③図書館活用教育研修会の3点を中心に取り組みます。

「協調学習」は、研究指定校2校(第四中学校・浜田東中学校)を中心に、仮説検証型授業研究を取り入れ、子どもの学ぶ姿から私たちが学び、授業改善に取り組みます。8月3日・4日には、東大CoREFから講師を招聘し、集合研修を行う予定です。指定校以外でも興味をもって取り組む先生方が少しずつ増えており、その成果を感じています。今年度は県立高校での取組も広がり、浜田高校がモデル校になったので、中高の学びがつながる絶好の機会と考えております。

上記の2つの柱に加え、学校訪問においても、教員が「何を教えたか」、「どのように学ばせたか」ではなく、子どもが「何ができるようになったか」、「どのように学んでいたか」、「何につまずいていたか」と、子どもたちの学ぶ姿を主語に私たち大人が語り合い、子どもたちの学ぶ姿から、次の授業づくりを考える姿勢を大切にしていきたいと思ひます。

このほか、全小学校への外国語教育訪問、中学生英検3級無料化事業、スーパーティーチャー示範授業研修、小学校教職員向け英会話教室等、子どもたちが社会の変化に対応し、生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指し、学校や先生方を全力で応援します。どうぞお気軽に声をかけてください。



## 「つながり」を大切に

浜田市教育委員会 派遣指導主事 佐々木 真理子

今年度より、特別支援教育の担当をしています。子どもたちが笑顔で過ごせるように、先生方や関係機関の方々とつながりながら、特別支援教育の推進と充実に向けて一緒に取り組んでいきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

### 学校訪問

各学校等のニーズや実態に応じて、はまだ特別支援教育相談室(STEP)、浜田教育事務所特別支援教育支援専任教員、ウィンド、子育て支援課、地域福祉課等と連携した「相談支援チーム」での訪問を行っています。特別な配慮を必要とする子どもの早期発見・早期支援につなげるために、校内委員会で検討の後、活用してください。また、各学校の相談や研究授業等について、浜田教育事務所の指導主事と連携して学校訪問もします。

### 教育支援委員会

調査票をもとに、関係機関と連携し、各学校等訪問、保護者面談、教育支援委員会を行います。各学校等と連携し、本人や保護者の思いに寄り添いながら、丁寧な教育相談、就学相談を心がけます。

### 《相談支援ファイルについて》

効果的な支援を適切に引き継ぎ、就学前から学齢期、社会参加まで切れ目のない支援を行うために、個別の教育支援計画、個別の指導計画、引継書等を綴り、関係機関とも共有できるファイルとなるようご活用ください。新学習指導要領を受け、特別支援学級在籍児童生徒、通級による指導をうける児童生徒全員が活用できるようにファイルをお渡ししました。特別な配慮を必要とする幼児児童生徒についてファイルを作成される際はお渡ししますのでご連絡ください。



「つながり」を大切に一緒に取り組んでいきます。お気軽に声をかけてください。

## 日々の気づきを大切に

### 浜田市教育委員会 派遣指導主事 品川 仁志

今年度から浜田市教育委員会で勤務することになり、生徒指導を中心に担当することになりました。初めての事ばかりで、周りの方に助けていただきながら毎日の仕事に取り組んでいます。現場での経験を生かし、先生方のサポートができるように頑張りたいと思います。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のための臨時休業があり、例年とは全く違ったスタートになりました。各学校では工夫を凝らした新たな対応をいただいています。文部科学省からも「児童生徒の心のケアや環境の改善に向けたSC及びSSWによる支援の促進等について」通知がありました。浜田市でも全小中学校にSCが配置され、2名のSSWが派遣型訪問を実施しています。SSWについては、今年度も年度初め巡回相談として市内すべての学校を訪問し、校内体制や児童生徒の様子等について情報交換を行いました。多くの事例で初期対応が大切になってきます。先生方の「気づき」が、多くの児童生徒、家庭の支援の第一歩になります。どんなことでも構いませんので、遠慮なく浜田市教育委員会まで相談をしてください。また、例年であれば夏季休業中に関係機関の担当者の方と一緒に市内すべての学校を訪問していますが、今年度は夏季休業も短縮されますので、時期をずらして訪問させていただく学校もあると思います。先生方の「気づき」を共有できる貴重な場と考えていますので、よろしくお願いいたします。



新型コロナウイルス感染症対策の関係で出張等が無くなり、児童生徒と関わる時間が増えているのではないのでしょうか。目の前の子どもたちとの関わりの中で日々取り組まれていることが、子どもたちの成長にかけがえのないものであることは間違いありません。これからを担う子どもたちのために、先生方を精一杯サポートし、一緒に取り組んでいきたいと思っています。

## 各市町の取組から ～邑南町～

### 共に学び合い、高め合うおおなんの学び

#### 邑南町教育委員会 派遣指導主事 三宅 誠幸

邑南町派遣指導主事4年目を迎えました。今年度もよろしくお願いいたします。邑南町では学びの主体者・協同者を育てることをめざして「学び合い授業づくり」を町内すべての小中学校で実践研究しています。邑南町学び合い専任講師の山下政俊先生と学校訪問をさせてもらい、昨年度はモデル校3回、それ以外の学校は1回、授業を見せていただきました。

課題に対して子どもたちが司会をし、子どもたち同士で話し合いを進めながら答えを見つけていく授業。子どもたち同士で答えについて議論しながら答えを見つける授業。子どもたち同士で答えが1つでない課題について納得解を見つけていく授業。先生方はあたたかく見守ったり、子どもたちが授業に取り組みやすいように発問や資料、掲示を工夫したり、ねらいから外れそうになったときには気づきを与えたりと、授業の主体は常に子どもでした。

ある学校では、子どもたち同士が言い争いをしたときに、他の子が「イライラすることもあるよね」「○○ちゃんのいいたいこともわかるよ」「でもこう言った方が伝わりやすいんじゃない？」と声をかけ、子どもたち同士で解決に向かったという話も聞きました。学び合い授業づくりだけでなく、校内全体で子どもが主体の指導をして来られた先生方の努力の成果だと感じました。

コロナ禍の中で、これまで通り顔と顔を近づけての学び合い学習は難しいのかもしれませんが、これまで取り組んできた「すべての子どもの学びを保障する」「子どもたちを学びの主体者・協同者に育てる」ことは現在の状況でも変わらないと考えています。どのようなことが効果的か教育委員会としても一緒に考えていきたいと思っています。

